

公開講演会

古代の仏像の不思議

——環境への心性史の立場から——

三宅和朗

## 一、はじめに

倭国に仏教が伝来した六世紀中頃以来、おびただしい数の仏像が制作されてきた。その仏像を古代・中世の人々がどのように受け止めていたのか。人間にとって仏像も環境の一部であるので、環境への心性史<sup>(1)</sup>の一齣として考えてみたい。

そもそも仏像は人間が造り出した彫像であった。しかし、古代・中世史料からすると、仏像は汗・血・乳・涙を流すなど、様々な不思議を現す存在であったことが知られる。現代の我々が博物館で鑑賞する仏像とはかなり相違する。仮に、現代の博物館の仏像を基点として、それを「仏像」と呼ぶとすれば、不思議を現す仏像は「仏像以前」と便宜的に区別してみたい。宗教学の島田裕巳氏<sup>(2)</sup>によれば、寺の本尊として信仰の対象であった仏像は、近代以降、博物館に出展され、美術品として鑑賞の対象として扱われるようになったと指摘されている。ここでいう「仏像以前」とは信仰の段階、現代の「仏像」は美術品の段階と重なるといつてよいだろう。

本稿の最初に、諸史料から「仏像以前」の仏像を紹介してみたい。「仏像以前」の仏像の多彩な活動に関しては、近年、美術史において注目されている。後述するが、仏像は生<sup>な</sup>ま身<sup>ま</sup>（生きている）という理解である。たしかに、仏像は開眼（入魂）によって、人々の礼拝の対象になるとしても、それだけではあるまい。異界のホトケを造形化した仏像が、生<sup>な</sup>ま身<sup>ま</sup>の姿と理解され、人々の祈りに応えて不思議なことを行つたと理解すべきであろう。仏像はもとより異界の存在であったはずである。

しかも、かかる仏像と同様の不思議は、基層信仰の神々の世界にも現れていた。古代の神々と仏の不思議には共通項が少なくない。周知のように神々は基本的に姿形が見える存在ではなかった。この神々の不思議も、仏像同様、神の異界性に由来するはずである。

### 3 古代の仏像の不思議

以上を前置きとして、そうした仏像の異界性、不思議を現す存在を、古代・中世の人々の心性に遡って検討し、「仏像以前」の段階から仏像が「仏像」と見なされるようになったという仏像への認識の変化を環境への心性史の具体例として言及してみたい。

#### 二、仏像の不思議——「仏像以前」の世界——

まずは、「仏像以前」の仏像の不思議の例を各項目ごとに分類整理して紹介する。具体例をすべて取り上げるのは紙幅の関係からも困難であるので、挙例は原則、一例に止めている。

#### (1) 仏像の汗・血・乳・涙

イ、汗

〔史料1〕相模国、八月十日国分寺の仏流す汗雨の如し。同廿六日定額寺大仏汗下す流れの如き由を言ふ。

〔日本紀略〕天慶三年（九四〇）一〇月己未条

〔史料2〕又平等院より申して云はく、今日午刻、阿弥陀堂の仏并に鏡汗出づ。是先蹤快らずと云々。尤も慎むべし慎むべし。

〔玉葉〕文治二年（一一八六）九月戊寅条

〔史料1〕は相模国の国分寺や定額寺の仏像が汗を雨のように流したという記事で、〔史料1〕が一番古いとみられる。確かに仏像が人間のように汗を流すのは不思議なことである。実は東大寺大仏のような金属製の仏像が汗をかき（『日本紀略』寛弘二年（一〇〇五年）九月辛酉条）のには理屈がある。金属のコップに水滴がつくのを思い起こせばよいわけで、空気には水蒸気が含まれるが、気温が高いほど水蒸気は多く含まれる。それが冷やされると、その表面に水滴がつくと同じである。現代でも金属の仏像のある寺では仏像の汗が見出される<sup>5)</sup>。

ということであれば、仏像の汗はそれほど不思議なことではないかも知れない。しかし、「史料2」の平等院の阿弥陀堂（鳳凰堂）の仏（阿弥陀如来像）は木像（寄木造）である。木像が汗をかいたというのであるから、この方が不思議であろう。これは金属の仏像の汗が広まって、本来、汗をかくはずのない木像まで汗をかくと観念されたと解釈すべきではないか。

口、血

〔史料3〕 雍熙二年八月初七日、造像の次、仏牙を像面に入れ、已後刻に至る。時に仏の背上に出血一點。何の瑞を知らず、衆人咸く見る。…

（尙然「入瑞像五臟具記捨物注文」）

〔史料3〕は尙然が宋に入り、擁熙二年（九八五）に中国で釈迦像を作らせて、日本にもちかえった。それが京都嵯峨野の清涼寺の釈迦像である。尙然は帰国直前、台州で現地の工人に木彫像を二週間程で作らせたが、この仏像には釈迦の歯が納められ、体内に絹製の五臟六腑が納入されて、仏像は生ま身と理解されていたらしい。〔史料3〕によると、八月七日、仏牙（歯）を像の面に入れると、已後刻（午前一〇時半頃）、像の「背上」に一点の出血があった。「衆人咸く見る」とは、この不思議には目撃者がおり、間違いではないという意であろう。

ハ、乳

〔史料4〕 諸楽の京の越田の池の南の蓼原の里の中の蓼原堂に、薬師如来の木像在り。…（盲目の母親）像の面に向ひて、以て称礼せしむ。逕ること二日にして、副へる子の見れば、其の像の臆より、桃の脂の如き物、忽然に出で垂る。子、母に告げ知らず。母、聞きて食はむと欲ふが故に、子に告げて曰はく、「搏りて吾が口に含めよ」といふ。之を食へば甚だ甜し。便ち二つの目開きぬ。…

（『日本靈異記』下―一―）

仏像の胸から乳が出るという話である。平城京の左京九条四坊の南に蓼原堂があり、薬師如来の木像が安置されていた。そこに七歳の娘を連れた盲目の母親が困窮のあまり、「我が命一つを惜むに非ず。我が子の命を惜むなり。一旦に二人の命を已へむ。願はくは我に眼を賜へ」と祈っていると、蓼原堂の経営に当たる檀越が女を堂

の中に入れ、木像に向かつて礼拝させた。二日後、子供が見ると、木像の胸から「桃の脂の如き物」が垂れている。子供が母親に知らせると、母親は「搏りて吾が口に含めよ」といった。母親が食べると、大変おいしかったと同時に二つの目が開いた。

薬原堂とは、民間の堂であつたらしい。そうした場に貧窮民が身をよせ、その願いに薬師仏も応えていたことが窺える。薬師仏の胸から湧き出した「桃の脂の如き物」とは何であらうか。〔史料4〕の終わりにある「甜」という言葉は『日本靈異記』にもう一か所あつて、中―二では「母の甜き乳」とある。薬師仏の木像の胸からも母乳が出たと解釈しておきたい。

## 二、涙

〔史料5〕…〔証空〕としごろの本尊、絵像の不動尊にむかひて、「今生の命は師にかはる。ねがはくは、明王、臨終正念にしてころし給へ」といひてぬかづきければ、絵像の不動尊、眼より紅の涙をながして、「汝は師に、我は行者にかはらん」とのたまひて、証空病やみ、智興命いきぬ。…

〔宝物集〕四

『宝物集』には、園城寺の智興は病にかかり危篤となつた。陰陽師の安倍晴明は、身代りをたてれば命が助かるという。多くの弟子たちの中で、ただ一人、若い弟子の証空が身代りを申し出た。智興と証空が命の入れ替えをすると、証空は重病となつた。証空は、長年、祈っていた不動明王の絵像に「今生の命は師にかはる。ねがはくは、明王、臨終正念にしてころし給へ」といつて祈つた。その時、不動明王の絵像は眼から血の涙を流し、「汝は師に、我は行者にかはらん」というと、「証空病やみ、智興命いきぬ」とある。なお、『発心集』六一にもほぼ同様の話が載るが、この後に「かの本尊は伝はりて後、白河院におはしましけり。常住院の泣不動と申すはこれなり。御目より涙を流したる形、げにさやかに見え給へりけるとぞ」とあつた。

この話は仏像ではなく、絵像のケースである。絵像も仏像同様のふるまいをする。絵像は、第一に「汝は師にかはる。我は汝にかはらん」という声を出す不思議。第二に証空の命の身代わりになる（代受苦）という不思議、

第三に目から血の涙を流したという不思議である。しかも、不動明王の絵像は白河上皇の御所や常住院に伝来し、赤い血の涙の跡がはつきり見える。この第三の件は本話を真実だと受け止める証拠の印でもあった。なお、第一・第二の不思議については後述する。

以上、「仏像以前」の仏像の不思議として、汗・血・乳・涙を出すという例をあげた。仏像は「はじめに」でも指摘したように、人間が造った彫像であった。それがいつの間にか、不思議な振舞いをしたと理解されていたことが窺えよう。生きている仏像の姿はこれに留まるものではない。さらに他の例も指摘しておきたい。

## (2) 仏像が動く

### イ、動く

〔史料6〕：(高大夫) 楚ヲ持テ、「此ノ仏ハ此ニ可御シ」ト、「彼ノ仏ハ彼ニ可御シ」ト差スニ付テ、仏達、人モ手モ触レ不奉ヌニ、踊テ楚ノ差ス所ニ自然ニ居給ケリ。多ノ人此ヲ見ケリ。「高大夫、仏ノ座位直シ奉ラムガ為ニ、極楽寺ニ可行シ」ト兼テ聞キ繼テ、可然キ人共モ有ルガ、此ク仏達ノ各直リ給フヲ見テ、泣々ク貴ビケリ。

〔今昔物語集〕三一—三三

極楽寺に木像の両界の尊像(金剛界の三七尊、胎藏界の九尊)が安置されていたが、長い間、諸尊の位置が間違っていたのを誰一人直すことができなかった。高大夫(高向公輔)が極楽寺で楚(杖)をもち、「此ノ仏ハ此ニ可御シ」「彼ノ仏ハ彼ニ可御シ」と指示すると、仏たちは誰も手を触れないのに、躍り上がって杖の指す場所に移っていた。多くの人がこれを見て、皆、泣く泣く尊んだ。

極楽寺では、四六体もの仏像が高大夫の杖の指示で、所定の位置に移動した。しかも、それを多くの人たちが見ていたというのであるから、ここにも目撃証人がいた。仏像が動くというのは、日常茶飯事ではないだろうが、時には仏像も動くことがあったとみられる。

口、火事の時に飛び出す

〔史料7〕聖武天皇のみ世に、泉国泉郡の部内珍努の上の山寺に、正観自在菩薩の木像を居きて、敬ひ供へまつりき。時に失火して、其の仏殿を焼きぬ。彼の菩薩の木像は焼くる所の殿より、二丈許出でて、伏して損ふこと无かりき。：

〔日本霊異記〕中―三七

仏像が動く例の仲間に火事の時に飛び出すという例もあるもので、動くとは区別して取り上げた。〔史料7〕は『日本霊異記』の話で、和泉国の珍努の山寺では正観自在菩薩の木像を安置してあった。時に失火があり、仏殿を焼いた。木像は仏殿から二丈ほど飛び出し、うつ伏せになったので、焼けることがなかった。木像が火事の時、仏殿から飛び出し、しかも火の粉を浴びないように、うつ伏せになっていたのである。不思議ではないか。

ハ、風にはためいて絵像が動く

〔史料8〕：：（治安元年（一〇二二）、後一条天皇の病氣平癒を祈願して、法成寺（無量寿院）で絵仏供養）百体ノ丈六ノ仏ノ被懸並レ給テ、風ニ被吹テ動キ給フガ生身ノ仏ノ如クシテ貴キ事無限シ。□糸幡、庭ニ立並ベタル、風ニ被吹テ動クモ目出タシ。亦、二ノ大鼓ノ莊光ヲ放ツガ如シ。実ニ此等、仏ノ浄土ト思エテ貴シ。：

〔今昔物語集〕 一一―一二

〔史料8〕は法成寺の法会の話。法成寺とは藤原道長建立の大寺院で、最初は無量寿院と呼ばれ、平安京の一条の東側に造営された。治安二年（一〇二二）、金堂などが落成して法成寺となるので、治安元年には金堂は未完成とみられる。そのような段階で後一条天皇の病氣平癒を祈願して、道長や頼通も参列した法会が行われた。高さ三丈という大日如来の絵像を中心に百体の丈六の絵仏が並んでいた。この光景は百体の絵仏が風に吹かれて、生ま身の仏が動くようだとあり、仏の浄土のようだとある。

布（紙か）に描かれた百体の絵仏が風に吹かれてヒラヒラする光景。それを仏が動いている、生ま身のようなとある。想像するに見事な光景ではないか。現在の鯉のぼりで、多数の鯉が一斉に泳ぐのに似るところがあるう。

## 二、人間と性交する

〔史料9〕和泉国泉郡血淳の山寺に、吉祥天女の摂像有り。聖武天皇の御世に、信濃国の優婆塞、其の山寺に來り住みき。之の天女の像に睨めがらちて愛欲を生じ、心に繫けて恋ひ、六時毎に願ひて云ひしく、「天女の如き容好き女を我に賜へ」といひき。優婆塞、夢に天女の像に婚くふと見て、明くる日まは瞻れば、彼の像の裙もの腰に、不淨染み汗れたり。：  
 〔『日本靈異記』中—二三〕

吉祥天女の摂像（塑像）がある和泉国の血淳の山寺（無住）に信濃国の優婆塞が来て住んだ。優婆塞は美しい天女の像を流し目で見、愛欲の心を募らせ、ひたすら恋ひ慕つて、「天女の如き容好き女を我に賜へ」と六時毎に祈つていた。優婆塞は夜の夢の中で天女と性交したと見て、翌朝、天女の裳の腰の辺りに、不淨の物がついていた。優婆塞は恥ずかしく思い、「我は似たる女を願ひしに、何ぞ忝かたじけなくも天女専ら交りたまふ」と申し上げた（天女像の前で優婆塞が声を出して語つた）が、このことは誰にもいわなかった。ただ、弟子が優婆塞の言葉を聞いていたらしい。のちに弟子は優婆塞に礼をつくさないで、優婆塞に追われて里に出ると、優婆塞の悪口（天女との性交）をいいふらす。里人がこれを聞いて、真実を確かめると、天女像は「淫精」で汚れていた。

これは、優婆塞の願ひに應えて、吉祥天女の像が優婆塞と性交したという話。ただし、天女像の裳に「淫精」が付いていたというのであるから、直接、優婆塞は性交できたわけではなかったといえよう。吉祥天女は一線を守つたといふべきか。

## ホ、迎講

〔史料10〕：既迎講ノ日ニ成テ、儀式共微妙ニシテ事始マルニ、聖人ハ香炉ニ火ヲ焼テ娑婆ニ居タリ。仏ハ漸ク寄り來リ給フニ、觀音ハ紫金ノ台ヲ捧ゲ、勢至ハ蓋ヲ差ス、樂天ノ菩薩一鷄婁ヲ前トシテ微妙ノ音樂ヲ唱ヘテ、仏ニ随テ來ル。

其間、聖人涙ヲ流シテ念ジ入タリト見ユル程ニ、觀音紫金台ヲ差寄セ給タルニ、不動ネバ、「貴シト思ヒ入タ



ルナメリ」ト見ル程ニ、聖人氣絶テ失ニケリ。音楽ノ音ニ交レテ、聖人絶入タリト云フ事ヲモ不知ザリケリ。仏  
既ニ返リ給ナムト為ニ、「聖人云事モヤ有ル」ト、時賛<sup>かはる</sup>マデ待ツニ、物モ不云ズ不動ネバ、怪ビテ弟子寄テ引キ  
動カスニ、ミタリケレバ、其ノ時ニゾ人知テ、皆、「聖人往生シニケリ」ト云テ、見<sup>の</sup>泣キ貴ビケル。…

〔今昔物語集〕一五―二三

迎講という儀式の場でも仏像が動くが、迎講について簡単に言及しておく。源信の『往生要集』（九八五年）に  
より、極楽往生への信仰が広まる。その際、人間が阿弥陀や菩薩に扮して、往生人を浄土に迎えるという、「死  
の予行演習」とでもいべき迎講が始まった。迎講も源信の創始とみられる（『法華験記』下―八三など）。

迎講の研究は、美術史の關信子氏の論文に詳しいが、当初は人間が阿弥陀や菩薩の面をかぶり、仏の装束を身  
に付けて、実施していたらしい。それが一三世紀になると、阿弥陀の木像の中に人間が入って、仏像自体が動く  
という形が現れる。仏像内は内刳りがしてあり、仏像に入る人間は、中に在る二本の角材の間から首を出し、両  
肩で仏像を背負い、仏像のみぞおち辺に開けられた横長の覗き穴から外の様子を窺うという。そのような人間が  
中に入って動く仏像が四体現存し、岡山県の弘法寺の阿弥陀像が今なお、「現役」で迎講に使用されている（上  
半身のみ）。

〔史料10〕は丹後国の聖人の迎講の話である。当日、迎講が始まると、聖人は香炉をもち娑婆（現世と見立てた  
ところ）に坐っている。そこに人間が扮した仏たちが近付いてくる。観音は紫金の台をもち、勢至は柄のついた  
蓋を差し、天の音楽の菩薩は鵝妻で妙なる音楽を奏して、阿弥陀に従って来る。聖人は涙を流して祈っている  
と思われたが、観音が紫金の台を寄せても、聖人は立ち上がらない。「貴シト思ヒ入タルナメリ」と（聖人の弟子も  
含めて見物人が）見ていたが、その時、実は聖人は死んでいた。聖人が死んだとは誰も分からないので、阿弥陀  
はすでに帰ろうとし、「聖人云事モヤ有ル」と思っていたが、何もいわず動かない。弟子が引き動かすと、す  
でに聖人は硬直状態になっていた。その時、人々は聖人の死を知り、「聖人往生シニケリ」といって、泣いて尊んだ。

迎講という人間の儀式に仏の世界が交錯する様子がみてとれる。そこでは、人間が仏の恰好をしただけであっても、聖人には生ま身の阿弥陀の来迎に見えていたのではない。本話から、迎講とはそのような世界でもあったことが窺えよう。

### (3) 人間の身代りになる

次に仏像が人間の身代りになって働くという例をあげる。これには、身代わりのタイプと代受苦というタイプとがあるが、代受苦の例は涙のところの〔史料5〕の証空の話で取り上げているので、ここでは、仏像が人間の身代りになるという例を紹介する。

〔史料11〕：時に其の女王の児、いそがは忿々しく走り来て、母に白して曰はく、「快たぐましく故京より、食を備けて来れり」といふ。母の王聞きて、走り到りて見れば、王を養しし乳母なり。乳母談りて曰はく、「我、客を得たりと聞きしが故に、食を具して来つ」といふ。：悦の望に勝へずして、得たる衣裳を捧げて、乳母に著せ、然る後に堂に参りて、尊像を拜せむとするに、乳母に著せたりし衣裳は、其の天女の像に被れり。：（『日本霊異記』中―一四）

聖武天皇の代、諸王二三人が宴席を持ち回りで設けていた。ところが、最後の女王は貧しく宴席を準備できない。平城京左京の服部堂の吉祥天女像に対して女王は「願はくは我に財を賜へ」と祈る。すると、「故京（藤原京か）の乳母が沢山のご馳走をもって現れた。おかげで宴席は大成功。女王は他の王からもらった衣裳を乳母に着せ、その後、服部堂に行き、吉祥天女像を拜もうとすると、乳母に着せたはずの衣裳が仏像の肩にかかっていた。不思議に思い、乳母の所に行くと、乳母は「知らず」と答えた。それにより、吉祥天女が女王の祈りに応えて助けたと分かった。この話から、仏像も身代わりになって人々を救うと観念されていたことが知られよう。

### (4) 光る

仏像が光するという不思議もあった。仏像の光の由来としては、釈迦の「三十二相」の中に、金色相、丈光相、白毛（毫）相があった（『大智度論』四）。また、仏像の金色には、鍍金、漆箔、金泥といった技法があり、金色の光を放つ仏像が演出される。かかる仏像の実例は数多く指摘することができよう。

ここで注目した「仏像が光る」例は、右とは事情が異なる。鍍金などではなくとも、単なる木や石の仏像が光るといふ不思議な例であり、しかも、仏像の素材の段階から光を発していたと語られているものもあった。そうした仏像が光るのと似ているのが、本来、光るはずのない「高僧が光る」例である。

〔史料12〕河内国言々く、「泉郡の茅渚海の中に、梵音す。震響、雷の声の若し。光彩しく、晃り曜くこと日の色の如し」とまをす。天皇、心に異しびたまひて、溝辺直<sup>⑩</sup>を遣して、海に入りて求訪めしむ。

是の時に、溝辺直、海に入りて、果して樟木の、海に浮びて玲瓏くを見つ。遂に取りて天皇に献る。畫工に命じて、仏像二軀を造らしめたまふ。今の吉野寺に、光を放ちます樟の像なり。（『日本書紀』欽明一四年五月戊辰朔条）響きは雷のようである。照り耀くこと太陽の光のようだ。天皇は、溝辺直を派遣して、海中を捜させた。この時、溝辺直は樟の木が海に浮かんで輝いているのを見つけ、天皇に献上した。天皇は畫工に命じて、仏像二体を造らせたが、これが吉野寺に光を放つ樟の像である。雷に当たった樟木が漂流、音や光がしたのを溝辺直が天皇に献上した。仏像にしたところ、その仏像も光を放ったという話である。この場合の仏像の光は稲妻・稲光を受け継いでいるといえよう。<sup>⑩</sup>

〔史料13〕（釈義覺は難波の百濟寺に居住）時に同じ寺の僧慧義といふひと有りき。独り夜半を以て出で行く。因りて室の中を見るに、光明照り耀く。僧乃ち之を怪しびて、窃に牖の紙を穿ち窺ひ看るに、法師端坐て経を誦せり。光、口より出づ。…（『日本靈異記』上―一四）

百濟の釈義覺は、七世紀後半、百濟滅亡後、難波の百濟寺に居住。百濟寺にいた慧義が義覺の部屋が光ってい

るのを不思議に思い、義覚の部屋の窓の紙に穴をあけて覗いてみると、法師（義覚）はきちんと正座して、お経を読んでいた。光はその口から出ていたという。

以上、本来、光るはずのない仏像や高僧も光るといふ不思議の例をあげた。

### (5) 声を出す

〔史料14〕：聖武天皇の御世に、其の部（和泉国日根郡）の尽恵寺の仏の像、盗人に取られき。時に路行く人有りき。寺の北の路より、馬に乗りて往く。聞けば声有りて、叫び哭きて曰はく、「痛きかな、痛きかな」といふ。…良久に往徊り、窃に従者を入れて、屋内を窺ひ看しむれば、仏の銅像を仰け奉り、手足を剔り欠き、錠を以て頸を締る。即ち捕へ打ち問ひて、「何の寺の仏像ぞ」といふ。「尽恵寺の仏像なり」と答ふ。…衆僧輩を蔽り、損はれたる仏を安置し、哭きて寺に殯し、その盗人を刑罰たずして捨つ。…

〔日本霊異記〕中―二二

〔史料15〕：広達、縁有りて里（大和国吉野郡桃花の里）に出で、彼の椅を度り往くときに、椅の下に音有りて曰はく、「嗚呼、痛く踰むこと莫れ」といふ。禪師聞きて、怪しび見れども人无し。良久に徘徊り、忍び過ぐるこど得ず。椅に就きて起ちて看れば、未だ仏を造り了へずして棄てたる木なり。…有縁の処に請け、人に勧め物を集め、阿弥陀仏・弥勒仏・観音菩薩等の像を彫り造りまつること、既に訖りぬ。…

〔日本霊異記〕中―二二

〔史料14〕は、和泉国日根郡に盗人がいて、常に寺の銅製品を盗み、带状に伸ばしては売っていた。聖武天皇の代、尽恵寺の仏像が盗まれた。その時、通行人は、寺の北の道を馬に乗っていた。「痛きかな、痛きかな」と泣き叫ぶ声がある。通行人はしばらく行き来して、従者に（盗人の家の）屋内を見させると、盗人が仏の銅像を仰向けにし、手足を切り取り、鑿で首を切っている。通行人は盗人を捕えた。尽恵寺の僧たちは御輦を飾り、壊された仏像を安置し、寺にお連れした。そして、寺で殯をし、盗人を追放した、という話。

仏像は解体されている最中に、「痛きかな、痛きかな」と声を出した。僧たちは壊れた仏像を輦に載せて寺に

迎え、殯をした。仏像は単なる彫像ではなく、生ま身として扱われていた様子が窺えよう。

なお、仏像が声を出す例の言葉は「史料14」の「痛きかな、痛きかな」、「史料15」の「嗚呼、痛く踰むこと莫れ」の一言（橋桁にされていた未完成の仏像）であった。こうした一言を繰り返す例が少なくない。これは後述するが、神の託宣との関係も考えられるのではないか。

### (6) 形をかえる

〔史料16〕：是の日に、丈六の銅の像を元興寺の金堂に坐せしむ。時に、仏像、金堂の戸よりも高くして、堂に納れまつること得ず。是に、諸の工人等、議りて曰はく、「堂の戸を破ちて納れむ」といふ。然るに鞍作鳥の秀れたる工なること、戸を壊たずして堂に入ること得。…

〔日本書紀〕推古一四年（六〇六）四月壬辰条

元興寺（飛鳥寺）に丈六仏を納めようとした。ところが、仏像が金堂の戸よりも高く、堂内に納めることができなかつた。そこで、工人たちは相談して、「堂の戸を破ちて納れむ」といった。しかし、鞍作鳥は「秀れたる工」で、戸を壊さずに堂に入れることができたという、有名な話。鞍作鳥だけが大仏を堂の戸から入れられたというのは、「秀れたる工」としての鳥の力だというのが、『日本書紀』の理解である。しかし、実際には、堂の戸が広がったか、仏像が縮まったか、あるいは両方かによって、仏像は堂内に入れたのであろう。寺や仏像は形をかえることがあると観念されていたのではないか。

### (7) 人間の中から仏が現れる

〔史料17〕（老尼の前で）童、楯すはえを持って遊びけるままに來たりけるが、その楯して手すさびのやうに額をかけば、額より額の上まで裂けぬ。裂けたる中よりえもいはずめでたき地藏の御顔見え給ふ。尼拝み入りてうち見あげたれば、かくて立ち給へれば、涙を流して拝み入り參らせて、やがて極樂へ參りけり。…（『宇治拾遺物語』一一一六）

地藏菩薩は毎日、夜明けに歩くと聞いた老尼は、地藏に会いたいがあまり、博打に騙されて、「ぢぎう」という名前の童のいる家に案内された。童が楛（木の小枝）をもって遊びから戻ってくると、尼は夢中になって伏し拝み、土間にひれ伏した。童は、楛で何気なく額をかくと、額から顔の辺まで裂けて、地藏の顔が見えた。尼はよく拝んでから仰ぎ見ると、地藏がお立ちになっっているの、尼は涙を流して拝み続けて、そのまま極楽往生を遂げた。童から地藏菩薩が姿を現すというのは、宝誌和尚の顔が裂けて観音菩薩の顔が覗いているという宝誌和尚立像（一一世紀、京都市西往寺蔵）とも重なる。

### 三、仏像・神々と異界

#### （一）仏像の生身性

近年、仏像の生身（生きている）については、美術史家に指摘がある。たとえば、内田啓一氏は、「あたかも現前にいますようなホトケ、単なる仏像ではなく、意志を持つようなホトケ、直接的な御利益を与えてくれるホトケ。生身の定義は難しいが、通常のホトケ以上のなにかを持つホトケが生身のホトケのようである」<sup>(13)</sup>、奥健夫氏は「仏像ならざる仏像」<sup>(14)</sup>と指摘される。また、中世信仰社会史の大喜直彦氏は「仏像などは決して物体ではなく、人間的生命体と同様なモノと理解されていた」<sup>(15)</sup>とされているが、いずれも、筆者が「仏像以前」の仏像とした段階が、それに該当する。

かかる生ま身の仏像は仏像自体の表現にも反映する。内田氏によると、「耳穴の貫通・鼻穴の貫通、歯牙の取り付けであるいわゆる歯吹き、像内の五臓六腑、鈴などによる音声、着衣、植毛あるいは貼毛」があり、仏像を人間の姿に近付けようとしていた。<sup>(16)</sup>また、絵画でも山越阿弥陀図と五色糸、阿弥陀来迎図の髪繡から人々は阿弥陀仏を体感できると指摘されている。<sup>(17)</sup><sup>(18)</sup>

## (2) 古代の神々の不思議と異界

「仏像以前」の生まれ身の仏像に関して、筆者が注目したいのは、古代の神々の世界にも不思議はあり、仏像の不思議と共通するところが多々あったという点である。即ち、「仏像以前」の仏像の不思議はけっして仏像だけのことではなかった。本来、姿形をもたない神も異界の存在として、特別な力を發揮していたのではないか。その点では仏像も同様で、異界の存在として不思議なことを現していたと考えられるのではないか。

## イ、血

『古事記』上によると、イザナキ・イザナミが国を生み、森羅万象を産んだ後、イザナミは火の神カグツチを産んで「美蕃登」(陰部)を焼かれ、「遂に神避り坐しき」。妻を失ったイザナキは、カグツチの首を「十拳劍」で斬った。劍の先についた血が岩の群れにほとばしりついてイハサクなどが生まれ、劍の元についた血が岩の群れにほとばしりついてミカハヤヒなどが生まれ、また、劍の柄に流れ集まった血が指の間からも漏れてクラオカミなどが生まれたとある(同様の神話は『日本書紀』神代第五段第六の一書、第七の一書、第八の一書にもある)。

この神話の意味については諸説あるが、イザナミの陰部は火山の火口、血は溶岩とみて、火山噴火が背景にあるという説がよいのではないかとみている。いづれにしても血が出るのは仏像だけではなかったといえよう。

## ロ、乳

『古事記』上の出雲神話の一節に、根国でオホナムチが八十神に殺されると、キサガヒヒメとウムガヒヒメの力で復活するが、キサガヒヒメ(赤貝の神格化)は赤貝の粉を集め、ウムガヒヒメ(蛤)がオホナムチの傷口に「母の乳を塗」ると、オホナムチが「麗しき丈夫」として復活して、再び出歩くようになったとある。<sup>20)</sup> 仏像から乳が出る話があったが、『古事記』神話はそれと比較できよう。

## ハ、涙

『播磨国風土記』揖保郡条によると、「神嶋。…この嶋の西の辺に、石神在す。形、仏のみ像に似たり。故れ、因りて名と為す。この神の顔に、五色の玉あり。また、胸に流るる涙あり。是も亦五色なり。泣く所以は、品太の天皇のみ世に、新羅の客来朝けり。すなはちこの神の奇偉しきを見て、非常之珍の玉と為ひ、その面の色を屠りてその一瞳を掘りき。神、由りて泣く。…」とある。神嶋（播磨灘の家島諸島）の西辺に石神がいる。形は仏像に似る。この神の顔に五色の玉があり、胸に流れる涙がある。泣く理由は、品太天皇（応神）の世、新羅人が来朝した際、神の立派な様子を見て、すばらしい玉があると思ひ、顔面の色と眼球もめぐり取った。それにより、神は涙を流したとある。

現在、この島（上島）には、「人面岩」という白っぽい巨岩があり、人の顔に見えるという。この岩の存在が最初にあつて、「新羅の客」云々という伝承が生まれたのであろう。古代の人々の豊かな想像力に触れる思いがする。

なお、日本の神々は姿形が見えないと先に指摘したことについて、ここで補足しておく。たとえば、上島の「人面岩」もそうであるが、神の場合、仏像のようにはじめから人のような姿形をもつ神が信仰されていたわけではない。「人面岩」とは、本来、神がよりつく磐座で、神の形そのものではなかった。後の時代にそれを『風土記』のように、仏像に似ているとか、神の顔面だとか、人々が想像したに過ぎない。乳のところのウムガヒヒメも同様で、母乳を出してオホナムチの傷口に塗ったとあるので、女神と母乳との関係が見出せそうであるが、順番は逆で、蛤から出る汁を母乳に見立てて、その上で母乳を出すウムガヒヒメというように神話が展開したと考えるべきであろう。カゲツチの場合も、この神話の最初の段階に、火山噴火で溶岩や火が周囲に飛び散るといふ現象があつて、それを神話化しているとみるのがよい。はじめから、人間のような姿形をした神が首を斬られて、血がほとばしり出たというわけではないはずである。

## 二、動く



すでに指摘した通り、仏像が動く例は多々あった。しかし、これも仏像だけの振舞いではなかった。『常陸国風土記』筑波郡条で、「神祖の尊」が諸の神の所を巡行する。「駿河の国福慈の岳」(富士山)に着くと、日暮れになったので、宿を頼んだが、富士山は宿を断った。そこで、「筑波の岳」に宿を乞うと、筑波山は食事を設けて神をもてなしたという話。「神祖の神」は日暮れに富士山と筑波山を来訪したとある。来訪神(動く)というのは、日本の神の属性の一つとして、これまでもよく指摘されてきた<sup>(2)</sup>。

ホ、火事の時に飛び出す

天徳四年(九六〇)九月二三日、子刻、内裏で火事があり、内侍所の神鏡は「飛び出て南殿前の桜に著く。小野宮大臣警を称す。神鏡下りて其の袖に入る」とある(『江家次第』一一)。これは仏像が火事の時に外に飛び出すというのと比較されよう。

へ、人間と性交する

仏像と人間の性交に対応するのが、『古事記』中(崇神)の三輪山伝承で、イクタマヨリヒメのもとに、夜半に男が訪れ、ヒメは懐妊する。ヒメの両親は男の素性を知らうと、麻糸を針に通して男の衣の裾に刺すよう、ヒメに教える。夜明けに見ると、糸は戸の鉤穴を通り「美和山に至り而神社に留りき。故、其の神の子とは知りぬ」。これにより、男の正体が神と知られたという神と人間の神婚伝承がある。

ト、光る

『古事記』上の出雲神話の中に以下のような神話がある。オホクニヌシとスクナヒコナとが共に国作りを行っていたが、スクナヒコナは常世国に行ってしまった。オホクニヌシは「吾独のみして何にか能く此の国を作り得む」というと、海を照らして近付いてくる神があった。その神は「能く我が前を治め者、吾能く共与に相作り成さむ。若し然ら不者、国成り難けむ」という。そこで、オホクニヌシは「然あら者治め奉る状は奈何」というと、「吾者、倭之青垣の東の山の上に伊都岐奉れ」と答え、この神こそ、「御諸山」(三輪山)に鎮座する神だとある。

海を照らして近付いてくる神と雷に当たって樟木が漂着する話（史料12）とはパラレルの関係にある。

チ、声を出す

雄略天皇が葛城山に行幸したところ、ヒトコトヌシが天皇の前に現れ、「吾者悪事なれ雖一言、善事なれ雖一言、言ひ離つ神。葛城一言主之大神者也」と名乗った（『古事記』下（雄略））。ヒトコトヌシとは一言で託宣するといふ意味であろう。これは、神が声を出す例であるが、仏像が声を出す例でも、「痛きかな、痛きかな」（史料14）、「嗚呼、痛く踰むこと莫れ」（史料15）とあるように、一言の場合があった。これと神の託宣の一言とは対応しよう。なお、託宣には審神者という仲介者がいたはずである。託宣の言葉は一言であったとしても、それを人々に分かりやすく伝えていた仲介役の存在を忘れてはならないだろう。<sup>(2)</sup>

リ、形をかえる

『日本霊異記』下―三一によると、美濃国方県郡のある女は、二〇歳過ぎて結婚もしないのに、懐妊した。それから三年経て、二つの石を生んだ。五寸四方大きさで、一つは青白のまだら、一つは青色であった。この石は毎年大きくなっていった。石が形を変える、成長するという話で、伊奈波の神が託宣して「其の産める二つの石は、是は我が子なり」と告げたとある。先述の寺や仏像が形を変える（史料16）と対応しよう。

### (3) 小結

以上、述べてきたところをまとめると、左の通りである。

第一として、古代（中世）の仏像の不思議は、仏像の汗・血・乳・涙以下、多様であったが、それは人々の祈りに応えるものであり、異界からのメッセージを伝えるものであり、仏像が自ら存在感を示すものでありと様々であるが、仏像が彫像としてのみ受け入れられていたわけではなかったことが窺える。

第二に、「仏像以前」の仏像は生ま身と解されているが、本来、造形化されない神の不思議とも交錯すること

に着目するならば、仏像も神と同様、人々の前に異界の不思議の力を現していたことによると判断される。古代（中世）の人々の間は、そうした信仰の中に生きていたといえよう。

第三に、以上のような「仏像以前」の仏像が、現代の博物館では美術品として鑑賞の対象となり、異界性を喪失して、不思議を現さない存在になった。仏像は時代毎に様式や素材が変化したが、それだけではなく、仏像への心性も変化したということでもあろう。

#### 四、おわりに——「立ちすくみ」——

最後に、仏像の忌詞「立ちすくみ」について触れておきたい。忌詞とは、神祇祭祀の場で仏教や身体に関わる詞を他の詞で代用する語を指す。たとえば、仏は「中子」（『皇太神宮儀式帳』、『延喜式』五〈齋宮〉）というが、「仏は常に堂や厨子の内部に安置されてゐるので、ナカゴといふ別名で呼び得たと考へられる」と説明される<sup>23</sup>。伊勢神宮や齋宮では仏像を中子といわなければならないというタブーがあったことになるが、『皇太神宮儀式帳』（八〇四年）や『延喜式』の時代には、伊勢神宮や齋宮にも仏教が入り込んでいた様子が窺えよう。忌詞としては、他に経は染紙、塔は阿良良岐、寺は瓦葺、僧は髪長、尼は女髪長などであった（『延喜式』五〈齋宮〉）。

平安時代の終わり頃の史料に、仏に対して「立ちすくみ」という忌詞が出てくる。「立ちすくみ」の最初は、一二世紀後半の『天照皇太神儀軌』のようである（『天照皇太神儀軌』には「立強」とあり、「タチコハリ」という訓があるが、「立ちすくみ」と意味は同じ）。それ以前はいつまで遡るのか分からないが、以後、一三世紀代のものである『花鳥余情』、さらには、近世の林羅山の『本朝神社考』、山崎闇齋の『大和小学』、久志本常彰の『忌詞内外七言集成』まで続く。

では、「立ちすくみ」とは何か。『扶桑略記』天曆八年（九五四）一二月五日条に以下の記事がある。即ち、天曆の頃、浄蔵が八坂寺に住んでいた際、強盗が「房中」に乱入、「炬を燃し劍を抜き、目を瞋して徒に立つ。更に其の所作無し。且言語無し。前後覚へず。稍数刻を経る。：浄蔵、本尊に啓白して早く免し遣すべしとてへり。時に賊徒適尋常に復す。礼を致して共に去る」。傍線箇所を『拾遺往生伝』中では、強盗は木のように「強はり」、動かなくなった。『古事談』三一―一八では、強盗はそのまま立っていて、動作も言語もない、先後不覚だとなる。そして、一三世紀前半の『宇治拾遺物語』一〇―四に至って、強盗は「おのおのたちすくみて、さらにする事なし」として、「立ちすくみ」の語が使用されている。

『扶桑略記』に戻ると、八坂寺に夜、強盗が入った。浄蔵の僧房で本尊に睨まれたため、強盗は「立ちすくみ」状態になった。浄蔵の言葉に従い、本尊が許すと強盗は元通りになり、逃げて行ったということであろう。以上から、「立ちすくみ」とは、しばらくの間、動かなくなる、言葉も失うということであり、一定の時間を経ると、元に戻るということに他ならない。とすると、本来、仏像も人間のように動くこともあるが、時には動かなくなる。そのように観念されていたことから、仏像に「立ちすくみ」という忌詞がつけられたのではないか。「立ちすくみ」という忌詞は、これまで指摘してきた古代（中世）の生ま身の仏像のあり様をよく反映しているといえる。なお、「中子」という忌詞と「立ちすくみ」との関係であるが、「中子」は堂や厨子の中で一時的に動かなくなった状態をあらわしているともいえるのではないか。

いずれにしても、仏像の「立ちすくみ」という忌詞は、「仏像以前」の仏像と一致する。この言葉は一七四〇年の『忌詞内外七言集成』まで使用が辿れるので、少なくとも近世まで仏像は時には動く観念されていたらしい。ところが、現代人の多くは、仏像が「立ちすくみ」にあるとはみていない。仏像はまったく動くことがないという確信のもと、博物館や美術館で仏像をじっくりと鑑賞しているわけである。仏像が「仏像」に認識されるようになるという心性の変化の時期は「立ちすくみ」の言葉を手がかりにすると、近世と近代の間に位置づける

ことができるのではないだろうか。

注

- (1) 環境とは開発・自然災害・気候変動ばかりでなく、人間にとって身近な人間ももとより、人間の周囲すべてを環境と考えている。したがって、仏像も人間にとって環境の一部ということになる。
- (2) 心性とは「広い意味での『こころのありよう』を言う、自覚されない隠れた領域から、感覚、感情、欲求、さらには価値観、世界像に至るまでの、さまざまなレヴェルを包み込む広い概念」(二宮宏之「社会史における集合心性」)〔二宮宏之著作集〕二、岩波書店、二〇一一年、初出一九七九年〕一〇二頁)を指す。人間が仏像にどのような心性を懐くのかを歴史的に考察するのが環境への心性史である。
- (3) 島田裕巳『日本宗教美術史』芸術新聞社、二〇〇九年)三五二―三五三頁。なお、碧海寿広『仏像と日本人』(中公新書、二〇一八年)においても、明治の廃仏毀釈の中、仏像は博物館の中で文化財・美術品として再生され、以後、美術と信仰の間での揺れ動いた時期を経て、現在の仏像への認識は「寺院より博物館の側に主導権があるのではないか」(二二七頁)と指摘されている。
- (4) 仏像の汗については、笹本正治『中世の災害予兆』(吉川弘文館、一九九六年)六九―七〇頁、森茂暁「仏像の汗」〔日本歴史〕六五八、二〇〇三年)、大喜直彦「神や仏に出会う時」(吉川弘文館、二〇一四年)七八―七九頁参照。
- (5) 管見の限りでは、現在も汗を出す仏像の例として、宮城県柴田町大光院・鉄造阿弥陀如来坐像四体(文永三年(一二六六)銘)、栃木県宇都宮市一向寺・銅造阿弥陀如来坐像(応永二年(一四〇五)銘)、愛知県稲沢市長光寺・銅造地藏菩薩立像(文暦二年(一二三五)銘)がある。
- (6) 泣き不動の伝承をめぐるのは、梁瀬一雄「泣き不動」の説話」(『説話文学研究』三弥井書店、一九七四年、初出一九四二年)、中前正志「不動の涙」(『神仏靈験譚の息吹き』臨川書店、二〇一一年、初出一九九六年)など参照。
- (7) 大喜氏は、中世の仏像や名号が火事の際に飛び出したりして焼けなかった事例をもとに、「仏像は焼けてはならない、焼けないもの」という中世人の観念が読み取れると指摘されている(大喜「焼かれる仏像」〔中世びとの信

仰社会史』法蔵館、二〇一一年、初出一九九五年）二二八～二三三頁）。ただし、『史料7』からしても、仏像は焼けないという観念は中世になって現れたわけではなく、古代に遡ることを確認しておきたい。

- (8) 法成寺の法会で百余体の絵仏が供養されていたことは、『小右記』『左経記』『日本紀略』治安元年三月甲辰条にある。

- (9) 關信子「迎講阿弥陀像」考I～IV（『仏教芸術』二二二・二三三・二二四・二二八、一九九五～一九九六年）。

- (10) 小川光陽「吉野寺放光樟像」の文化史的背景（『文化学年報』一三、一九六四年）、竹居明男「吉野寺縁起」の史料的价值をめぐって（『日本書紀研究』一一、塙書房、一九七九年）守屋俊彦「日本靈異記上卷第五縁小考」（『日本古代の伝承文学』和泉書院、一九九三年、初出一九八五年）、丸山顕徳「漂着靈木説話」（『日本靈異記説話の研究』桜楓社、一九九二年）。

- (11) 仏像を手輿に載せる光景は、『因幡堂縁起絵巻』にも見える。それによると、橘行平は、祖父好古の二条京極の家にある持仏堂に、因幡国から飛来した薬師如来像を移した（詞書）とあるが、絵には手輿に載せられ僧によって運ばれる薬師如来像が描かれている。

- (12) 宝誌和尚立像については、毛利久「宝誌和尚像」（『日本仏像史研究』法蔵館、一九八〇年、初出一九五八年）、荒木浩「二重の顔」（『日本文学』二重の顔 大阪大学出版会、二〇〇七年、初出二〇〇五年）など参照。

- (13) 内田啓一「仏画における生身性について」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要（第三分冊）』五七、二〇一二年）三三頁。

- (14) 奥健夫「生身仏像論」（『講座日本美術史』四、東京大学出版会、二〇〇五年）三一六頁。

- (15) 大喜、前掲（4）七九頁。

- (16) 内田、前掲（13）三四頁。その他、金沢邦夫「菌吹如来像の表現とその意義」（『美術史研究』一〇、一九七三年）、阿部泰郎「生身と流血」（『仏教美術における身体観と身体表現』上野記念財団助成研究会、二〇〇二年）、奥「裸形着装像の成立」（『MUSEUM』五八九、二〇〇四年）、奥「仏像と人体」（『東京大学次世代開発センター紀要 文化交流研究』二〇、二〇〇七年）、阿部「生身」をめぐる思想・造型と説話」（『説話文学研究』四三、二〇〇八年）、

生駒哲郎「重源の勸進活動と生身の大仏」(同上)、奥「仏像の生身化について」(同上)、稲垣泰一「説話文学における生身譚」(同上)、山本勉「生身仏」(『清泉女子大学キリスト教文化研究所年報』一九、二〇(一九九一年)、弥永信美「生きている仏像」(『現代思想』一四一―一六、二〇一八年)など。

(17) 内田、前掲(13) 三六―五一頁。

(18) 仏像(絵像)の不思議は、彫像(絵巻物)にも見出される。主なものを制作年代と特徴とともに挙げておく。

仏像が動く例として、兵庫県宝塚市中山寺の十一面観音立像(八世紀、腹部がせり出し、右足親指を跳ね上げている)、三重県津市瀬古区の十一面観音立像(九世紀、右足の踵を上げる)、大阪市天王寺区四天王寺の阿弥陀如来像の両脇侍像(九世紀、片足を斜め後ろに上げる)、京都市左京区禅林寺の阿弥陀如来立像(鎌倉時代、後ろを振り返る「見返り阿弥陀」、奈良県斑鳩町勝生寺の十一面観音菩薩像(九世紀、足を踏み出す)、奈良県桜井市長谷寺の十一面観音菩薩立像(一三世紀、右手に錫杖をもち、右足を少し前に踏み出す)、京都市右京区清凉寺の「清凉寺縁起絵巻」(一六世紀、本物の釈迦像と模刻像とが夜に動いて入れ替わる)、京都市下京区因幡堂(平等寺)の「因幡堂縁起絵巻」(一四世紀、薬師如来像は因幡国守橘行平を追って、都の行平邸に飛来する)。

火事の時に飛び出す(光る)例では、滋賀県大津市石山寺の「石山寺縁起絵巻」四(一四世紀、承暦二年(一一〇七八)、石山寺本堂が火事で焼けた際、本尊が飛び出し、池の中島の柳の上に留まり、光った)。

高僧が光るケースでは、京都市東山区知恩院の『法然上人絵伝』八(一四世紀、燈火のない暗い夜、法然は両眼から光を発して経典を読む)。

仏像が声を出す例は、京都市東山区六波羅蜜寺の空也上人像(鎌倉時代、念仏を唱える)。

(19) カグツチ神話を火山噴火とみる説については、松村武雄『日本神話の研究』第二卷(培風館、一九五五年)三五四―三八五頁参照。最近では、保立道久氏がカグツチを火山神と推定されている(『かぐや姫と王権神話』洋泉社新書、二〇一〇年)七三―七四頁)。

(20) 守屋「母の甜き乳」(『日本霊異記の研究』三弥井書店、一九七四年、初出一九七一年)八五―八六頁、新谷正雄「ち【霊・乳】」(多田一臣編『万葉語誌』筑摩選書、二〇一四年)。

- (21) 神の来訪については、折口信夫氏のマレビト神の信仰（『国文学の発生（第三稿）』、『折口信夫全集』一、中央公論社、一九五四年、初出一九二九年）や堀一郎氏の遊幸神説（『古代伝承および信仰に現れたる遊幸思想』、『堀一郎著作集』四、未来社、一九八一年、初出一九八四年）などが参照される。
- (22) 西口順子氏は、託宣におけるよりまし（託宣を受ける）と審神者（神託を通訳する）との関係は、往生の際の病者（往生人）と病者に「どのような境界が見えるか」を詰問する看病人との関係（『往生要集』中、大文第六、臨終の行儀）に対応するとされた（『浄土願生者の苦悩』、『平安時代の寺院と民衆』法蔵館、二〇〇四年、初出一九六八年）二五三～二五七頁）。よりましと審神者、往生人と看病人の関係に注目したい。
- (23) 西宮一民「齋宮の忌詞について」（『上代祭祀と言語』桜楓社、一九九〇年、初出一九七四年）二九九頁。
- (付記) 近森正氏は「島が島になった島の歴史」（『史学』八八一、二〇一八年）において、イースター島の住民は自分の住む島を島とはいわず、大地と呼ぶ。しかし、ヨーロッパ人の植民地化が始まると、島はヨーロッパ人が領有する島になると指摘されている。島の認識をめぐる論は、仏像への心性を扱った本稿に参考となったことを付記させて頂く。

（慶應義塾大学名誉教授）